Trinity

キズナエピソード\_大鳥丹\_01

------------------------------------------

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

勝利の余韻を噛みしめていた俺は、丹に話しかけられた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

[丹]

「なんとか勝てましたね……

さっきは危ないところでした……。

ネコちゃん、助けてくれてありがとう」

[黒猫]

「いや、俺ができることをしただけだよ」

[丹]

「ふふ、その姿で敵の注意を引くなんて、

そう簡単にできることではありません」

［丹］

「あなたって見かけによらず、大胆な方なのですね」

［黒猫］

「……！」

[丹]

「あら？　どうしました、ネコちゃん？

立ち止まったりなんかして」

［黒猫］

「……いや、なんでもない。

さ、帰ろ帰ろ」

//ADV形式終了

//暗転

//背景:白い部屋

//ヴィジュアルノベル形式開始

白い部屋に戻って来た俺は、深くため息を吐いた。

「あなたって見かけによらず、大胆な方なのですね」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが想い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、夜の渋谷……。

その時の俺は、ホテル街をたまたま通っていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//背景:渋谷のホテル街(夜)

[とびお]

友達と遊んだ帰り、人通りが多くて歩き辛い道を避け、

ホテル街を通って帰ることにした。

［丹］

「ちょっと……やめてください

人を呼びますよ……！」

［男］

「んだよ！

どーせまだその気があるんだろ～？

いいじゃねぇか！」

［とびお］

男が20代程の若い女性を無理やりホテルに連れ込もうと

してるようだった……。

こんなドラマみたいな光景に出くわすとは……。

［とびお］

だが、生憎俺は

ここで助けに入るような男気は持ち合わせていない……。

彼女には申し訳ないが、ここは通り過ぎよう。

[丹]

「……っ！あ、あなた！

やっと迎えに来てくれたのですか？」

［とびお］

「……ん？」

[丹]

「もう……すごく待ったんですよ？

その間に変な男性に絡まれてしまって……」

［男］

「おいおい、おいおいおい～！

変な男性って俺のことかよ？

元はお前の方から――」

［丹］

「私、

今はこの人とちゃんとお付き合いしているんです。

だから、もう諦めて下さい」

［男］

「は？　こんなひょろっちいやつがか？

……それならお前に相応しい奴かどうか、

俺が試してやるよ！」

［とびお］

「こいつのダメ男具合テンプレすぎだろ……

おい、こっちだ！」

=========================スチルカットシーンA終了=========================

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

俺はとっさに彼女の手を引き、

後ろを振り向く事なく全力で走る。

無我夢中で足を動かし、気が付いたら交番の前にいた。

振り返ると男はおらず、

いたのは、俺の袖をつかんで息を切らした、自称俺の彼女だった

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//背景:夜の渋谷

［丹］

「はぁ、はぁ、はぁ……

ありがとうございます、本当に助かりました」

［丹］

「あなたって見かけによらず、大胆な方なのですね」

［とびお］

「いやいや、逃げないと俺も危なかったから。

でも、見かけによらずって、ちょっとショックだな……」

［丹］

「あ……ごめんなさい、

最初は、可愛い感じの方だと思ったので……。」

［丹］

「でも、腕を引っ張ってくれた時、

格好良くて、ドキっとしてしまいました……」

［とびお］

「ま、まあ、役に立てたなら、良かったよ」

［丹］

「本当にありがとうございました。

遅くなりましたが、私は大鳥丹。

私立武良穂の3年生です」

［とびお］

「えっ!?　が、学生なの？

見えな――あ！　いや、いい意味でだよ！

ほら、大人の女性の色気的な、さ！」

[丹]

「うふふ、やっぱり可愛いですね。

年齢より上に見られるのには慣れてますから、

気にしなくて大丈夫ですよ？」

[丹]

「ねぇ、ちょっとスマホを見せてくれますか？」

[とびお]

「え、あ、うん……」

[とびお]

丹の異様に大人っぽい雰囲気と、独特なペースに気圧され、

つい言われるがまま、手に持っていたスマホを渡してしまった。

［丹］

「ちょっとだけ待ってくださいね？」

［とびお］

「あ！　おい！　なにすんだよ！

勝手にいじんなって」

[丹]

「うふふふ。慌てないでください♪

なにかイヤラシイものでも入っているんですか？」

[丹]

「……はい、これでOKです」

[とびお]

「OKって、なにが」

[丹]

「とびお、くんと言うのですね。覚えました♪

今日は遅いので、今度きちんとお礼をさせてください。

それでは。また連絡しますね」

［とびお］

そう言って、甘い香りと俺の心に不思議な余韻を残して

丹は行ってしまった。

その後スマホを確認すると、丹の連絡先が登録されており……

［とびお］

「……あ、お気に入りになってんじゃねーか……」

//1話END